

ペン俳句会 句会報 (三百五十九号)

令和六年八月一日 (木)

兼題『七夕 (たなばた)』、席題『残』

句会を、今年七月と同じ場所で開催。出席七名

(欠席 ゆふき、良知、元斐、大阪の金魚姫各位)。投句十名 (ゆふきさん欠席)

宮原 凧

ほどけゆく紅やはらかに蓮の花

白日傘閉ず尼寺の低き門

七夕や駆け落ちをせし父と母

いよ白き夕闇揺らし酔芙蓉

残されし女ばかりや盆提灯

七夕や一つ残りし夢を書き

安藤 晃二

干し竿のズボン舞ひ上げ雷怒る

残照や漁船帰り来夏の浜

仙台の駅堂々と星祭

ハンサムな初夏の山あり伊吹山

竹垣に萱草萎る猛暑かな

稲妻が駅舎閉じ込む豪雨かな

松田 一文字

谷川の音かき消さむ蟬しぐれ

雷鳴や川筋けぶる露天風呂

入港の白帆まぶしき残暑かな

パツと開き遅れてドンと揚花火

七夕や短冊むすぶおさなき手

夕霧に合掌村は沈みけり

志村 良知

スタ―選手華燭人形七夕祭

残雪と噴煙映し山の池

中天に鈍き夕月梅雨明くる

熊蟬のただ喧し朝の道

百日紅静寂 (しじま) に揺るる昼下がり

河童忌や射る陽に怯む午後四時

森田 元斐

七夕へ介護のホーム満艦飾

残りものセールで賑わふ七月尽

この朝の恙なきこと夏の川

せせらぎにまじり初めし秋の声

せせらぎの白々とあり梅雨終ふ

喘ぎつつ登る坂道蟬の檄

大津 そうかい

「七夕の握手一つ別れかな

荒梅雨や倒れし古樹の根の無念

星空へ夢の遊泳蚊帳に入る

遠き帆や夏の残照なほしばし

成田山鰻重の照り琥珀色

なほ固きメロンあれかし青きまま

長尾 進一郎

夏休み日々に過ぎ行く名残り惜し

雑草のおらが天下や夏の庭

俯きて歩き続けて炎暑なか

七夕の願ひの数多竹たわめ

湯の街や追ひ越す浴衣外国語

かき氷食べてないよと紅き舌

中村 晃也

去り際にビールに残り一口に

岩礁は柱状節理夏怒涛

蚊を払ひキッチンで飲む残り酒

つかの間の風の運びし滝の音

夕顔に捕縛されたる道祖神

馴れ初めはインスピレーション星祭

浜口 金魚姫

七夕の願いの短冊燃え残る

七夕のいのり星追ひ天満橋

風が来て巫女鈴のごと百日紅

花火果て残像喧騒屋台の香

過去抜けて未来に飛び込め茅の輪かな

花火爆ぜよ夜空のすべてを独り占め

西川 知世

七夕の笹に人待つ逢瀬めき

水音の屋上庭園秋暑し

貸自転車出払つてある盆の月

蚊遣の香残るカーテン富士へ開け

水無月の富士に雲湧く朝の駅

残暑なか砂場にぞつの如雨露かな

次回は令和六年九月五日（木）、

兼題は季語「晩夏光」（宮原凧さん出題）、席題

は西川知世さん出題の「頭」です。

追記

季語を学ぶ 初字にかえて

西川 知世

兼題「晩夏光」は「晩夏」の傍題である。夏の末。夏の勢いが衰えを見せ始まるころ。そのころまだ日中の暑さは夏の勢いだが、さすがに夕暮れ時の空には秋の気配を感じるといふ、かすかな秋の気配を詠う夏の季語である。俳句は陰暦で季語が立っているので、現代、私たちが使っている陽暦では八月七日か八日ごろになり、ここにも季語の受難が著しい。しかし、ばんかという語感は、力強いひびきがあつて、同じ時候の季語、夏深しとは一線を画し、どこか男性的できつぱりとしている気がする。盛夏とは違った秋に移る頃の澄みを感じる季語である。

飯田龍太が解説する季語説明の中に、眼にうつる風景はそのままであつても、この内側には夏果てのおもいが深い。絢爛たる夕焼空を見るのも多くこのころ——とある。暑さのなかにも、逝く夏を惜しみ、詩を詠う心を起こすことが必要であらうか。季語の本意は、夏の暑さの続くなかに秋が確実にしのびよる季語で、下り坂にさしかかった夏、どことなくゆるんだ夏、ものさびしい気分のだよう夏とある。

紅くして黒き晩夏の日が沈む

山口誓子

晩夏光バットの函に詩を誌す

中村草田男

晩夏の音鉄筋の端みな曲り

西東三鬼

蝶にのみ風あるごとし晩夏光

横山白虹

晩夏光刃物そこらにある恐れ

大野林火

どれも口美し晩夏のジャズ一団

金子兜太

扉を押せば晩夏明るき雲よりなし

野澤節子

化野は石みな仏晩夏光

松野加寿女

縁に垂らすわが足大いなる晩夏

桂 信子

白粥を吹きくれる妻晩夏光

目迫秩父

晩夏光横切る鶏の首立てて

籠倉貞子